

「ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか」 人間を人間たらしめているもの「分かち合う心・通わせる心」

◎ 森から草原に出た人類の宿命 進化させた心でこの難局を乗り切ってゆく

協力なしには対抗できない生存競争と仲間の協力で維持した多産なしには生き延びられなかった弱い人類



チンパンジーから分かれた人類。人類は驚くほどの多産を仲間の強力・離乳食の発明で乗り切り、数を増やしてきた。

○ 集団としての協力が不安定な食料確保に不可欠

狩猟採取による不安定な食糧確保は徹底とした平等主義

集団の規律を乱すものの徹底した制裁

集団と集団の交流とネットワーク

贈り物・化粧は交流・ネットワークの大きな道具

○ 協力の質の変化「分かち合う心」 能力ではなく「心」が違う協力を進化させてゆく

この協力の中で、人間だけが本能・感情から脱して、思いやる心を育ててゆく

交流範囲が広いほど 食料確保など生存できる範囲が広がってゆく

敵と仲間の見分け 「分かち合う心・通わせる心」とその進化

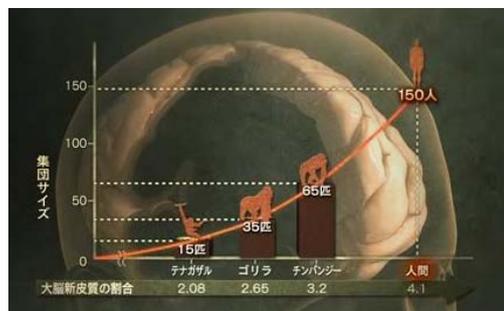
◎ 現生人の集団と動物の集団の協力の差

離れた場所の仲間に贈り物といった心の交流は人間以外にない心・要求されないことを相手をおもんばかって協力するそれが 大きな集団・離れた集団との交流を生み、厳しい生存競争を勝ち抜く原動力

動物の集団 直接的な親族・仲間 顔の見える集団 直接的集団内協力・種のつながりへの協力

人類の集団 直接的仲間集団とネットワーク集団 分かち合う心の集団の協力・交流

◆ 数多くの人数集団によって育まれた道具の発明



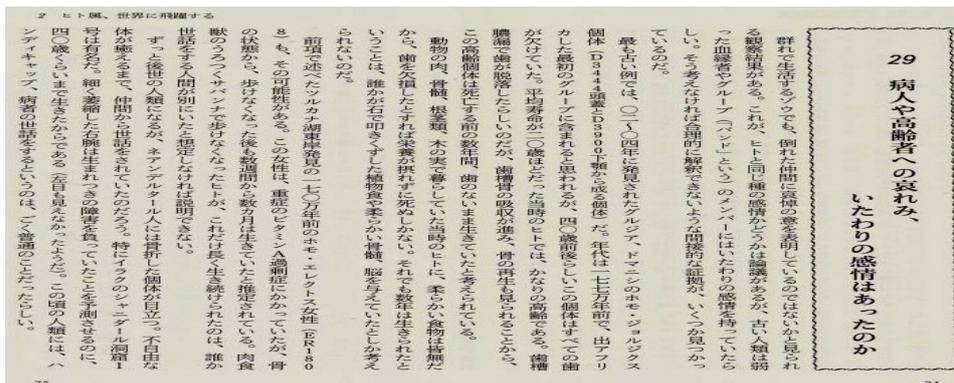
寄らば文殊の知恵 数多くの実践と成果の共有・伝達から生まれた 細石器・石刃と投擲具の急速な広がり

弱い人類の集団が草原に出て多くの敵と対抗して生き抜く力の源泉となったのがこの「おもんばかる心」の進化であるといわれる。 これにより、最大の課題である食糧調達が安定化し、生き延びてゆくことが出来たといわれる。

たとえば サルの行動は 群れとしての連携はあるが、群れを越えた交流はなく、言われれば起こす行動

人類の行動は 分かち合う心の行動が 遠く離れた場所の素材・道具の発明と急速な普及を生む

人口の急増・地球規模の気候変動などの苦難に遭遇する中 絶滅回避の原動力となった



◆ 氷期が芸術を誕生させた

6万年・7万年前頃の気候大変動で アフリカにいた現生人(ホモ・サピエンス)は2000人程度まで減少し絶滅する寸前の「絶滅危惧種」だったという。

祖先は必至の思いで、全く住めなくなった極砂漠化したアフリカ脱出を決行し、当時陸続きだったアラビア半島南端からサバンナ気候で住みやすかった中東に逃げた。そこには先住民族のネアンデルタール人がいたが、段々とネアンデルタール人との生存競争を制し、その後 世界へと飛躍してゆく。



最終氷河期の気候 Wikipedia より

「氷河からの避難地に人口が集中し、集団のサイズも大きくなり、集団のネットワークも広がった。

人口が多くなり、より多くの発明が出てくる中で、シュヴェービ洞窟壁画などの芸術が生まれた可能性が高い。」

「芸術は、氷期などの過酷な気候に対処するうえで重要であった。なぜなら、芸術は人々の相互協力を促したから。」
 芸術は、ヒトのコラボレーションで誕生したとも言える。

人類と他の動物を区別するもの、それは心を動機として生まれた「芸術・音楽・言語・宗教・計画をする能力・恋愛をする能力」

この地球上には、現在70億人にもおよぶ人間が暮らしている。なぜ、私たち人類だけがここまでの成功を収めることができたのか。

人類の祖先は一体どこから現れ、どのように世界に広がっていったのか… この人類最大の謎。

人類発祥の地は東アフリカだとされ、400万年前にはすでに初期の人類が現れていたと考えられており、その後人類は進化を続け、私たちは枝分かれした人類の中で最も新しい種ホモ・サピエンス(現生人類)と呼ばれる。

今までに発見されているホモ・サピエンス中ではもっとも古い19万5千年前の頭蓋骨の化石がエチオピア南部で発見されている。

人類と他の動物を区別するもの、それは芸術・音楽・言語・宗教・計画をする能力・恋愛をする能力などだ。

南アフリカのピナクルポイントには、16万5千年前のものと思われる居住跡がある。そこからは、石器や狩猟の道具、海貝の貝殻などが発見。貝を食料にしていたことは、潮の満ち引き等を予測するなどの証拠でもあり、人類の特徴である「計画性」がうかがえ、「心の共有」からもたらされたものであるという。そしてここから人類は世界中へと散らばっていった。

BBC 地球伝説 ヒューマン・ジャーニー ～遙かなる人類の旅～ 始まりの地 アフリカ より

◎ アフリカで生まれた現生人類はどうやってアフリカを出て、世界中へ広まっていたのか



アフリカで生まれた現生人類はどうやってアフリカを出て、世界中へ広まっていたのだろうか。

アフリカは三方を海で囲まれた大陸であり、おそらく私たちの子孫は唯一の陸路、北部のサハラ砂漠地帯を抜け、アラビア半島へ向かって脱出したと思われる。

約6・7万年前 火山の大爆発によって引き起こされた地球全体を覆う雲で15度以上寒くなり、海面は120m以上低くなるという気温の大変動がもたらした氷期到来し、約1万年前まで続く。食料豊富な草原は消失し、猛烈な乾燥・砂漠化と寒冷化が襲う。



アフリカにいた人類は食料を求めてアフリカを脱出を試みる。「気候モデリング」を使って、その脱出ルートを探したところ、私たちの祖先は約7万年前に、アフリカ大陸とアラビア半島が最も接近する場所、紅海の「嘆きの門」と呼ばれる場所を通してアラビア半島へ抜け出たらしい。

◎ 数の多い集団であり、心を通わせるネットワークをもつ現生人集団が投擲具など道具を発明し、難局を乗り切ってゆく

この時期ヨーロッパに広がっていたネアンデルタール人は頑丈な体格と力を持ち、食料として大型動物を狩り、寒冷化に対応しつつ、南下してきて、現世人の行く手を阻む。この過酷で厳しい食料戦争・ネアンデルタール人との争いの中 現世人類は投擲具を発明し、飛び道具を持つことにより、小動物を食料として狩ることを覚え、瞬間に世界各地へ広がってゆく。一方 体力に任せ、大型動物を狩る生活を続けたネアンデルタール人は絶滅へと進んでゆく。

現生人が投擲具を発明しえたのはなぜか・・・ それは集団と集団のネットワークの賜物という。

数多くの試行錯誤の実践が集団に伝わり、それがさらにネットワークの集団に広がって、またたくまに現生人は世界各地に投擲具とともに広がったという。 一方ネットワークを持たず、小集団の中で、暮らし方を変えられぬネアンデルタール人ほか原人達は絶滅の道をたどるしかなかった。



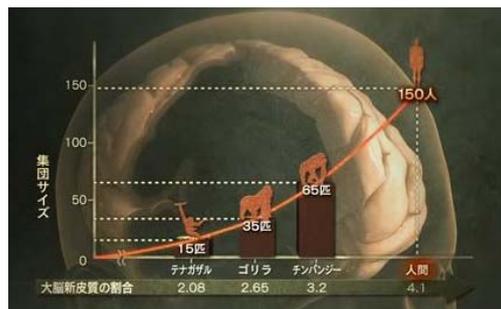
細石器・石刃と投擲具の発明と急速な広がり



大型石器に差はない



現生人は同時に 細石器 そして骨も道具として使い、食料にも 小動物が多数を占めるなど 大きな差が生まれてくる



寄らば文殊の知恵 数多くの実践と成果の共有・伝達から生まれた細石器・石刃と投擲具の急速な広がり



投擲具の広がり



現在もこの投擲具を使う暮らしをするアボリジニがいる

◎ 直接的に顔が見える直接的互惠関係とネットワーク交流による間接的互惠の関係

規律心の進化の中 心の動きは多様になり、制御の利かめ攻撃性が宿り、絶ちがたい攻撃連鎖が今も受け継がれている
道具の力は人類の集団のあり方にも影響を与えた。

現生人類を絶滅から救った投擲具は その後 人類の進化の過程の中で、集団・仲間を守るため、同じ人間にも向けられる。
罪を犯した者を罰する道具として使うことで、規律を強化し、集団のサイズを数千人の規模にまで拡大させ、
集団の拡大は、道具を生み出す能力を飛躍的に向上させる原因となっていく。

しかし一方、飛び道具の登場は果てしのない暴力の連鎖をも引き起こした。

その根幹にあるのは皮肉にも、人類に本能として備わっている「仲間を大切に思う心」にある。

道具を軸に、規律心の進化と攻撃性の制御という現代にまで続く宿命がこれ以後続くのである。



自分の前にいる見える仲間と目の前にはいないが、交流の中で生まれた仲間 つまり直接的な互惠関係とネットワーク交流による間接的互惠の関係 この二つの関係があり、人間の本能的な攻撃性は間接的な互惠に対してより攻撃的である。

規律心の進化が進む中 心の動きは複雑多面的になり、押さえの間かめ攻撃性が道具の出現・集団の拡大によって引き起こされてきた。そして、顔・表情が見える仲間には心が痛み、自制・制御が働くのに対し、見えぬ仲間には心の痛みは小さく、より攻撃的となり、その連鎖が今に至るまで、人類の宿命として続いている。

また、道具の出現は又、生態系にも大きな影響を与えて行ったのである。

◆ 協力と対立 人間がとる行動の柔軟性が協力と対立の両方向へ作用する

動物には本能として、種を守るための協力があり、人類は狩猟採取の時代 徹底した平等主義
それを乱すものへの制裁・排除を掟として、生き延びてきた。

この制裁が道具・武器の登場で 許しのない徹底したものへと進化してゆく。

(特に 協力し合う組織の中で、制裁・排除が生ぬると、やがて異分子が増殖し、組織は滅亡する。

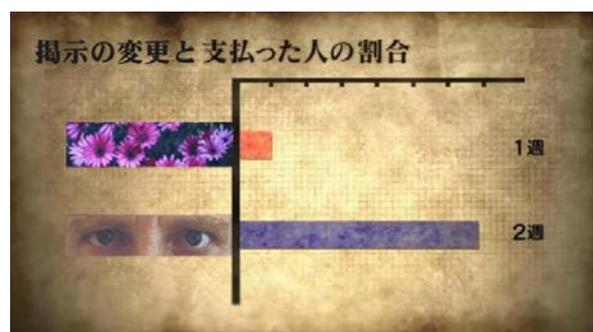
協力が強固な組織であればあるほど、制裁・排除は徹底したものとなる。

分かち合い・協力が強い人類では その制裁・対立も一層強いものとなり、道具はそれを更に助長した。)

この集団からの徹底した制裁・排除は人間を「他の人の眼をきにするか心を有する」動物へと進化させた

◎ 「分かち合う心」の進化が現生人類を他人の顔を気にする存在とした

一杯 50 円ですと書かれて設置された無人のコーヒー販売 一体何人がお金をいれるか・・・



◎ 「笑顔・表情」と「名前・贈り物」は人類に備わる心を通わせる互惠・協力関係の仲間を判別する方法

顔は直接互惠 名前は顔が見えない離れた間接互惠なに重要

◆ 沖縄でみつかった港川人 縄文人の祖先でないとの見方が強くなり復元顔が変わった



左：新しい研究をもとに、国立科学博物館が作り直した港川人の復元図

右：国立科学博物館に展示されていた旧港川人の復元像。

沖縄 湊川人は 当初 縄文人の祖先と考えられたので、日本人の雰囲気だったが、港川人の下顎骨の解析結果は港川人と本土の縄文人とはあまり似ていないことが判明。港川人の形態的特徴は、現代のオーストラリア先住民やニューギニア集団に近いことが明確となり、衝撃的に港川人の復元図が変わった。

